AFTER 5 CINEMA

# たかのてるみの気まぐれシネマタイム

第二次世界大戦が終った直後のフランスの小さな村。米軍を歓迎するための準備に沸く村人たち。アントワーヌとジュリアン兄弟が一番に見つけた一連隊は米軍ではなく独軍だった。それを知らない二人の誤った通報で大事件が。

## フランスの友だち

ジャン＝ルー・ユベール監督／リシャール・ボーランジェ、アントワーヌ＆ジュリアン・ユベールほか出演／1989年度作品／フランス映画／1時間48分／巴里映画配給／8月11日渋谷東急Bunkamuraル・シネマ1ほか全国で公開。

## フランスのオジサン・スターが人気。

エバ・ガードナーも、グレタ・ガルボも、もうこの世にはいない。でも、一世を風靡した大スターたちは、銀幕と私たちの心の中で永遠に生き続けるのです。

伝説的に語られて来た彼女たちの様なスターは、フツーの人々とまったく別世界に住んで、ちょっとやそっとでは手の届かない存在であるところに価値があった。それがまた大スターの証しでもあったわけですが、最近は、親近感のある身近な存在であることが、スターの条件のひとつでもあるみたいですね。

確かに、最近は、あんまり大げさな美男美女って、人気ないみたいですしね。いわゆる流行り顔と端正な顔との間には、時代と共に大きな隔りが生まれてもいる様で……（キレイ過ぎる顔って、整形などで、自由自在にいくらでも作り出せるから、価値がなくなったせいかも知れません）。

それにしても、新人俳優や女優よりも、電車の中で見かけた男の子や、街ゆく女の子たちのほうが、よっぽどハンサムでカッコイイとか、美人でキュート、なんてことが日常の昨今は、本当に大物スター不在の淋しい時代ではあります。

フランスなどでは、いまだにアラン・ドロンやカトリーヌ・ドヌーブが、歳を重ねながらも、ちゃあんと現役でスターしていて、そのへんは若いタレント、アイドル至上主義の日本と違って、大人のスターが人気の中心となっています。

そんな中でも、異変はあって、やっぱりスターらしからぬ存在が、受けているのです。

ハリウッドでのダスティン・ホフマンや、日本のビートたけしに共通する様なオジサン風の俳優なんですが、今フランスではドロン、ベルモンドに次いで人気のある大スター。ドヌーブと共演をしたり、イギリスのピーター・グリナウェイ監督の新作に出演したりと、今やひっぱりダコ。リシャール・ボーランジェという俳優さんです。『ディーバ』や『サブウェイ』などにちょっと出演していて、日本でも知る人ぞ知る存在だったんですが、'88年にフランスのアカデミー賞といわれているセザール賞の主演男優賞を『フランスの思い出』で獲って以来、一躍大スターになってしまったわけです。

今年、49歳なので、もォー、本当にオジサンで、ちょっとガニ股気味に歩く姿は、スターのイメージからはほど遠い。自分でも、「俺は田舎モンなんだよ」なんて平気で言って、全然飾らない。

噛めば噛むほど人生の味がしそうな渋さや、最近とんとお目にかかれない、ぶっきらぼうな男の風情。このへんが大受けの理由でしょう。そのうえまた、ミュージシャンでもあり、大ベストセラーとなったエッセイの書き手でもあるのだから、カッコイイ。

実はボーランジェは、昨年、一年近く、大手洋酒メーカーのCMにも出演してはいて、多くの日本人の目に触れていたのですが、せっかくのムサいオッサン風が、小ぎれいな中年男に仕立てられてしまい、ボーランジェを知っている人も、彼と気づかなくって、残念。

彼の新作が、日本でも同時期に3本もロードショーされるので、そこからふたつ紹介。さて、その『フランスの友だち』は、彼がセザール賞を獲った前作の姉妹編とも言うべき作品で、彼と親友でもある、ジャン＝ルー・ユベール監督が、彼のために撮った作品。この作品も、監督の実の息子たちが登場して、ボーランジェ演じる〝オジサン〟（ここではドイツの脱走兵）との出会いと、交流を経て、ひと夏の間に成長していく話を描いている。たまたま出会った敵国の少年たちに、しだいに父親にも近い愛情を傾けていく〝オジサン〟役は、ボーランジェの真骨頂。

戦争の辛さ、残酷さを、怒鳴りながら子供たちに説得する〝オジサン〟の姿に、

「こういうオジサンも最近はいなくなっちゃったナ」

なんて、自分の子供の頃を思い出して、ホロリとしてしまう。久久に、人間らしく感動出来る映画なのですよ。そして、実生活でも子ぼんのうだというボーランジェの片鱗がうかがえ、〝いい奴じゃない、コイツ〟と、思わずこちらもオヤジギャル的言葉で賞讃してしまうのです。

一方、『コックと泥棒、その妻と愛人』は、くだんのイギリスの監督、ピーター・グリナウェイの作品で、いつもながらのエキセントリックな映画。ここではコックの役のボーランジェも、この映画の中でアッと驚く様なものを調理しちゃうのでお楽しみに。気の弱い方は、御用心。

舞台劇の様な構成で、場面ごとに、赤、白、緑と、基調のキー・カラーが変わり、それに合わせて出演者が装うゴルチエの衣装も変わったりと、華麗なる演出が目を奪う。その中で、ボーランジェは終始、白いコックのいでたち。この作品の中でも、正義漢的、いやコックとしての職人的と言うべきか、一本気の男を演じて、ますます男を上げてしまったのです。

人々が集うフランス料理店。顧客であるならず者で泥棒のアルバートは、手下たちと美しい妻を従えて夜な夜なディナーをとる。ある日、妻は学者である男にこの店で一目惚れしてしまい、二人は店の化粧室で情事を重ねることに。

## コックと泥棒、その妻と愛人

ピーター・グリナウェイ監督／リシャール・ボーランジェ、ヘレン・ミレン、マイケル・ガンボンほか出演／1989年度作品／英・仏合作作品／2時間4分／ヘラルド・エース配給／8月4日シネマライズ・渋谷にて公開。